

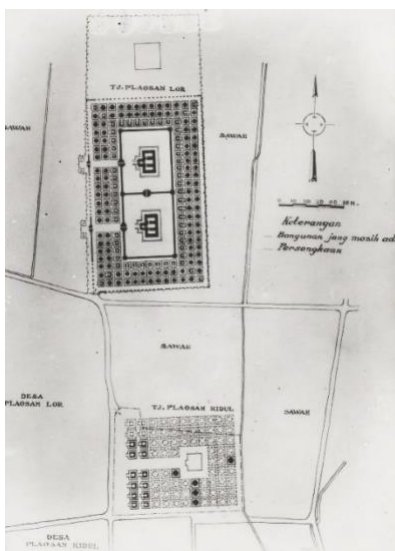
Plaosan temple

プラオサン寺院は、正確な建立年代は不明だが、北プラオサン外苑の短い刻文から、古マタラム王国(サンジャヤ王統)の第6代王であるラカイ・ピカタンによって建てられたと推測されている。

9世紀中頃、ジャワ島中部ではヒンドゥー教を信仰するサンジャヤ王統と、仏教を信仰するシャイレンドラ王統が対立していた。この対立を終わらせるため、ラカイ・ピカタン王は仏教徒のシャイレンドラ王統の王女、プラモーダヴァルダニーと結婚した。

この結婚を機に、ラカイ・ピカタンは仏教徒の妻への敬意と、ヒンドゥー教と仏教の共存を示すため、プラオサン寺院を建立したと広く考えられている。そのため、仏教寺院であるにもかかわらず、プラオサンのストゥーパは細長く、ヒンドゥー教のリングに似た特徴が見られる。

このような歴史的背景と碑文の内容から、プラオサン寺院はラカイ・ピカタンが王妃への個人的な贈り物として、また、両王統の和解と宗教的共存を象徴するために建てられたと考えられている。



北プラオサンと南プラオサンがあり、3 列に配置された 116 基の仏塔と 58 基の小祠堂、合わせて 174 基の小形の構造物がある。北プラオサン、南プラオサンどちらも西を向いており、構造も似ているため一つの複合体であると考えられている。

北プラオサンの 1 番大きな建物には 3 つの部屋があり、3 つとも同じ構造であった。かつては、それぞれの部屋に釈迦三尊(左に金剛手菩薩、右に文殊菩薩、真ん中に釈迦如来)が安置されていた。しかし、釈迦の像はオランダ植民地時代に失っている。おそらくオランダ人によって持ち帰られた。インドネシアはオランダに対し、植民地時代に持ち去られた仏像や文化財の返還を訴えている。これは両国間の長年の問題だが、近年オランダ人によって持ち帰られた仏像は少しずつインドネシアに返還されている。ジャカルタにあるインドネシア国立博物館にはオランダから返還された仏像が展示されてある。



↑インドネシア国立博物館にあるオランダから返還された仏像



↑ 土足厳禁であったため、靴を脱いであがった。

↓ 植えられていた菩提樹の葉っぱはストウパーに似ている。



遺跡の一部には文字があった。文字のつながりからその石がどこの石なのか判断していると聞いた。刻まれている文字は古ジャワ語とサンスクリット語を併用して書かれており、それらを専門的に研究している考古学者は読むことができる。

南プラオサンは、プラモダワルダニーの家族や兄弟、一般の人のために作られた。構造は北プラオサンと同じだが、北プラオサンよりは小さめであった。



最後に

プラオサンでは現在、修復作業が進められている。考古学者と職人が立ち会い作っているが、職人は減ってきていると聞いた。日本でも、鳥居や寺院を修復できる人は減っているのが共通の課題だと感じた。修復作業は歴史文化的に価値のあるものから進められているようだ。

